

たかみや か べ いりえ
広島県高宮郡可部町 入江家文書 目録

(『広島県立文書館 収蔵文書目録』第1集 所収)

広島県立文書館

平成24年(2012)6月

凡 例

- 1 本目録は、『広島県立文書館 収蔵文書目録』第1集(平成6年3月刊)に掲載された「広島県高宮郡可部町 入江家文書」の目録である。
- 2 目録の各項目は以下のとおり。

請求番号 本文書群の群番号(198817)と、この項目の記号を組み合わせたものが請求記号になる。

【例】 1 198817/1

表 題	資料にある原表題をそのまま採った。
年 代	資料に記された作成年月日を採った。
作 成	資料にある作成者名をそのまま採った。
形 態	資料の形態を記した。
数 量	資料の点数を記した。
- 3 文書の排列は請求記号順とした。
- 4 利用の参考のため、本文書群の解説を冒頭に付した。

解 説

1 入江家文書の由来

入江家文書 5 点のうち 4 点は、明治末から昭和初頭まで高宮郡可部町で山繭紬かべ やままゆつむぎの工場を経営していた同家に伝えられた、原糸仕入れや紬の販売に関する帳簿である。これらは、昭和48年ころ、当時広島県立図書館郷土資料室の赤木昌彦氏の紹介によって広島県史編さん室に預けられた。その後、県立文書館の開館に先立ち、改めて寄託をお願いしたところ、所蔵者の入江哲雄氏から昭和63年9月28日付けで寄贈されたものである。

なお、旧蔵者の入江哲雄氏は、工場を営まれていた入江寛六氏の息子に当たるが、先年亡くなられたためその夫人富子氏にお話を伺った。入江家は江戸時代には可部町で紺屋を営んでいた。富子氏が昭和2年に当家へ嫁入りしてきた頃は、山繭織りはすでに衰退期にあり、織子さんは4人だけで、あとは外機に出していたが、数年後に廃業したということである。

なお、富子氏のお話によると、文書館に5点を寄贈した後、蔵を整理した際に、2階にあった糸繰り道具は知人に譲り、新たに見つかった数点の帳簿は、人形製作の材料に求められる方があり、渡してしまったということである。

2 可部の山繭織物業について

入江家文書の解説に入る前に、可部の山繭納の生産とその販売について概観しておきたい。

山繭は、天蚕とも呼ばれる大型の蛾で、幼虫はクヌギ・ナラ・コナラなどの水分の少ない葉を好んで食べて繭を作る。その繭からは強伸度の高い良質な絹糸がとれ、それを紬に織り特産物としたのが山繭紬である。その工程は、まず山繭を灰汁に入れ、よく煮て水で洗い、しぼりあげて糸を引きだす。次にその糸を風のない天気の良い日に糊をつけ、一筋ずつ干す。さらに横糸によりをつけ、紬のようにして織った。

安芸地方は真宗地帯で殺生を忌避したため、江戸時代養蚕業はほとんど行われなかった。その中で、山繭は幼虫が繭を喰い破って出た殻を利用するため、生命を大切にするという信仰上の理由から、この山繭紬だけは、18世紀の初頭から高宮郡と山県郡・沼田郡などで女性の農間余業として発展した。

可部地域では、鈴張・小河内地域で織られたのが始まりとされ、とくに天保以降急速に生産地も広がった。その全体の生産高を知ることはできないが、他領へも相当数が移出されるようになった。そのため藩による生産・流通統制の対象となり、明治3年(1870)には、可部町と近隣7、8か村の山繭織りの婦人30数名が、藩の仕法を廃止し従来への慣行に戻すよう要求を掲げて広島まで直訴をしようとし、庄屋・組頭によって押し止められるという、いわゆる紬騒動まで引き起こしている。

可部地域では、幕末ころから、縦糸に木綿、横糸に山繭糸を用いる「本横紬」が織られていたが、原糸の欠乏のため、縦糸・横糸ともに木綿糸を用い、ところどころに山繭糸を用いる縞紬が明治初年ころに織られた。この縞紬は品質が粗悪なため需要も下がり、一時衰退した。

日清戦争以降の好景気に乗って山繭紬の販路が拡張し、明治29年6月には7人の株主によって可部山繭織物全社が設立された。この頃から生産形態も農村家内工業からマニファクチュアへと転換がはかられ、山繭交織紬の大量生産が行われるようになった。中原の松井・太田の工場に続いて明治44年には可部町で、住吉・深田・増井・入江の4つの織物工場が設立された。これらはいずれも15~20人の織工が、動力織機ではなく、従来より若干の改良を加えた織機を使いながら、それまでの農村家内工業による生産方法を一つの工場に集中させて、労働者間で分業体制をとらせることによって生産を行った。

副業で織る場合、1反織るためには3日から4日かかり、織り賃は1反につき10銭から20銭程度であった。この紬は軽くて強く、銘仙と木綿の中間の着物にふさわしいと強調して販売され、最盛期には、この行商に一度出れば千両箱がもどるといって売行であったという。

大正11年に広島県山繭織物株式会社が設立され、大正末期にかけて可部町の山繭紬生産は全盛期を迎えた。しかし、洋服の普及による和服類、とくに紬の需要が退いてゆく中で、絹織物・綿織物・絹綿交織の生産が始まり、主力をとくに絹綿交織へと移していき、昭和期に入って山繭紬の生産は急速に衰退していった。

3 入江家文書の概略

小作米収入を含む、明治45年より昭和初年までの入江家の経営全般にわたる帳簿である〔1〕を除く4点は、いずれも原糸の仕入、織子への原糸の払渡し、紬販売に関する帳簿である。

まず原糸の仕入については〔3〕があり、綿糸・絹糸(柞蚕糸)・山繭別に買入原糸の量と代価、買入先を記載している。買入量は、衰退期を反映していずれも少量に過ぎない。綿糸は広島市堺町と備後神辺、絹糸(柞蚕糸)は京都市の糸店から、山繭は可部・三次・戸河内・三良坂といった県内はわずかで、県外の備中井原を主として、その他石州川本や信州からも買入れている。

次に〔4〕・〔5〕は、いずれも外機に機掛けに出す原糸の払渡帳で、昭和2年から4年までの記載がある。〔4〕は、綿糸(二子・金巾・瓦斯)、絹糸(策蚕糸)・山繭という原糸の種類・名称別、〔5〕は織子別になっている。2冊の帳簿に現れる外機の織り子は、記載のない1人(可部)を除くと15人で、そのうち中原の出身が8人、亀山が2人、三入・鈴張が各1人、不明3人となっている。1人を除く14名が女性となっている。

〔3〕によって、紬生産の最盛期である大正11年からの入江家の紬取引の状況を知ることができる。これによると同家は昭和8年までは紬の販売を行っているようで、その支払が10年まで及んでいる例もある。最大の取引先は大阪市東区の杉本商店で、大正11年9月から11月までの3か月間に立絣だけで830疋、総額5383円の販売を行っている。その他県外の取引先には、名古屋市・和歌山市・神戸市・伊予三津浜町・門司市・八幡市があり、県内では広島はもちろんのこと、尾道・西条・下蒲刈なども見えるが、圧倒的に多いのが安佐郡内や近辺の小口取引である。

参考文献

『広島県史』近世2、『可部町史』、山本文子「山まゆ織」(『かんべ』29号)、広島市教育委員全『民俗資料調査報告 可部町を中心とした山まゆ織』(広島市の文化財 第6集)、広島市郷土資料館編『山まゆ織』(資料解説書 第3集)

(西村 晃)

広島県高宮郡可部町 入江家文書 (198817)

番号	表 題	年 代	作 成	形態	数量
1	万覚帳	明治45. 2.	入江店	横半	1冊
2	紬販売帳	大正11. 8.	入江寛六	横半	1冊
3	原系受入帳	大正15. 6.	入江寛六	豎冊	1冊
4	原系払帳	昭和 2. 4.	入江寛六	豎冊	1冊
5	外機原系払渡帳	昭和 2. 4.	入江寛六	豎冊	1冊